

## 学位請求論文審査報告書

氏名 英 亮

論文題目 最澄教学の思想史的研究

審査委員 主査 大谷大学教授  
博士（文学）[大谷大学]

采摺 晃

副査 大谷大学教授  
博士（文学）[大谷大学]

東舘 紹見

副査 大谷大学名誉教授  
Ph.D. [ハーバード大学]

ロバート・F・ローズ

### I. 論文内容の要旨

本論文は、最澄の生涯を通底する思想を探究しようとするものである。最澄は、その生涯の各段階において多種多様な著作をものしている。本論文は、その思想は「護国」であったとして、検証を進めていく。

本論文の目次は以下の通りである。

凡例

略号表

序章—本論文の目的—

(1)最澄の研究史

一九九〇年代

二〇〇〇年代

二〇一〇年代

(2)最澄研究の問題点とその課題

(3)本論文で用いる方法と対象

(4)本論の構成

第一章 天台修学による「護国」の企図

第一節 最澄における天台修学期の再検討

はじめに

第一項 最澄の天台修学期に関する先行研究の整理

第二項 最澄の天台修学期に関する筆者の見解

小結

第二節 南都における天台教勢と最澄への影響

	はじめに
	第一項 道璿から最澄への影響
	第二項 鑑真とその門下の天台布教
	第三項 寿靈撰『指示』に見える天台教勢
	第四項 景戒撰『靈異記』にみえる天台教勢
	小結
第一章	おわりに
第二章	次世代の“護国”を担う菩薩僧の育成
第一節	最澄と興福寺の関係性
	はじめに
	第一項 最澄と興福寺僧との交流
	第二項 最澄と興福寺の中間に位置する左大臣・藤原冬嗣
	小結
第二節	“三一権実論争”の目的
	はじめに
	第一項 先行研究の整理
	第二項 「有智者」「後学」の人物像
	第三項 道忠教団の教化活動
	小結
第二章	おわりに
第三章	南都諸宗に冠する“護国”組織の表明
第一節	最澄における清涼澄観の位置
	はじめに
	第一項 最澄による澄観撰『華嚴経疏』の入手と閲読の範囲
	第二項 最澄の著作に見える澄観撰『華嚴経疏』からの影響
	小結
第二節	最澄における荊溪湛然の位置
	はじめに
	第一項 最澄が将来した湛然の著作
	—最澄撰『台州録』・『越州録』に基づいて—
	第二項 最澄撰『依憑集』における湛然
	第三項 最澄撰『守護章』における湛然
	第四項 最澄撰『破比量文』における湛然
	第五項 最澄撰『血脈譜』における湛然
	第六項 最澄撰『顕戒論』における湛然
	第七項 最澄撰『上顕戒論表』における湛然

## 第八項 最澄撰『秀句』における湛然

### 小結

## 第三節 『法華秀句』序文に見える「一謀家」の考察

### はじめに

## 最澄撰『秀句』序文に見える「一謀家」の考察

### 小結

## 第三章 おわりに

## 結論

## 参考文献

序章では、先行研究を押さえた上で、従来のさまざまな研究分野（仏教学、歴史学、宗学など）に沿って最澄を捉えようとする限り、その生涯には大幅な飛躍があるかのように見えることを指摘する。その上で、いずれの段階においても見出すことができる“護国”というキーワードに沿って読み直すことによって、最澄の思想をより明確にすることができる。また、最澄の“護国”思想とは、『法華経』に基づく“一乗”の概念を前提としており、“御霊”を抜苦・成仏せしめることを内容としているとする。

第一章以降では、最澄の生涯を大きく三期に分類し、そこに通底している“護国”を抽出することによって、最澄の生涯を思想史として論じた。第一期は最澄が比叡山に入った時期から入唐前の間（延暦四年（七八五）～延暦二十三年（八〇四）、第二期は帰朝後から大乘戒運動までの間（延暦二十四年（八〇五）～弘仁十年（八一九）、第三期は『顕戒論』執筆後から『法華秀句』執筆までの間（弘仁十年（八一九）～弘仁十三年（八二二）である。それぞれに各一章を宛てて考察している。

（第一期） 第一章 天台修学による“護国”の企図

（第二期） 第二章 次世代の“護国”を担う菩薩僧の育成

（第三期） 第三章 南都諸宗に冠する“護国”組織の表明

第一章では第一期を取り扱う。比叡山入山から入唐するまでの期間である。当時は、法相・三論の対立などの仏教界における諸問題が頻発しており、朝廷がそれらを停止するように何度も指示を出している。朝廷としては、仏教による“護国”の威力が弱まることを危惧していたのだろう。また、朝廷は腐敗した僧侶を取り締まる動きも見せているが、これも“護国”能力の低下を抑制するためのものと予想される。以上の点を見ても、朝廷は既存の仏教勢力に依拠することなく、新たな“護国”を担う僧侶を欲していたということは想像に難くない。そのことに目を付けたのが叡山に入る以前の最澄であったと筆者は仮定した。換言すれば、第一章で述べたように、最澄は南都における新たな天台教勢を積極的に取り入れ、“護国”に転用しようとした結果、比叡山に入った可能性が高い。この最澄の一連の動きを

朝廷は評価し、桓武天皇の護持僧である内供奉十禅師に任命するなど、次世代の“護国”を担う僧侶として優遇するようになったのだろう。

第二章では第二期を取り扱う。帰朝後から弘仁十年（八一九）頃までの期間である。この期間について、第二章では、最澄が企図した“護国”宗団である「天台法華宗」の確立と、それらを構成する門弟たちの養成過程について注目した。第一節「最澄と興福寺の関係性」では、最澄が南都・興福寺で修業していた可能性が高く、弘仁七年（八一六）頃まで密接な関係性を維持し続けていたことを指摘したい。特に、「天台法華宗」における年分度者の多くが興福寺出身の僧侶である点は注意されよう。しかしながら、「天台法華宗」の年分度者となった後、比叡山を去る門弟が多数であったこともあり、弘仁七年（八一六）頃を境として、最澄は興福寺と距離を置くようになっていく。それに代わって、元々最澄と親密な関係にあった東国の道忠教団が“菩薩僧”の供給源としての役割を果たした可能性が高い。すなわち、最澄の課題は徳一側の法相教学を弾破すること自体にあったのではなく、それらを通じて、次世代の“菩薩僧”たちが道忠教団から流出することを阻止することにあったと推察されよう。

第三章では第三期を取り扱う。最晩年の弘仁十二年（八二一）である。この時期に著された『秀句』は、先に確認した諸宗が協力して“護国”するという思想と打って変わり、「天台法華宗」の“護国”姿勢は諸宗に冠するということを表明している。また、最澄の思想が変化した背景として、最澄の対論者が徳一以外の人物、おそらく既存の南都仏教教団に所属する人物から批判を受けたことが原因となっていることを指摘した。

さて、第一章から第三章までの結論を踏まえれば、最澄はその生涯を通じて、『法華経』あるいは天台教学に基づく“護国”を本朝において実現させようとしていたことが明白となる。

## II. 論文審査結果の要旨

本論文は、膨大な文献と関係者が交わる最澄という人物を、“護国”というキーワードのもとにまとめることで、新たな最澄像を描き出そうとするものであり、その点は大いに評価できる。

2021年は822年に没した最澄の1200年忌ということもあり、近年、立て続けに最澄研究の成果が発表されている。本論文では、参考文献表で13ページにも及ぶ大量の先行研究が参照されている。しかし、ごく最近に注目された成果は、本論文には反映されていない。十分に吟味する時間的余裕が無かったのであろうが、惜しまれる。

（例えば、大竹晋『現代語訳 最澄全集』全4巻（国書刊行会、2021）、大久保良峻『伝教大師 最澄』（法蔵館、2021）などが挙げられるが、これらは参考文献一覧には挙げられていない。なお、師茂樹『最澄と徳一』（岩波書店、2021）、木内堯大『最澄「守護国界章」全訳註』上巻（宗教工芸社、2021）などは、本請求論文の提出締切後に刊行されたものである。）

このように、最澄研究が次々と提出されている中であって、自らの理解を提示しようとしている点は、大いに評価される。

また、著作や記録に表された術語や事実が表面的に持つ意味を超えた（メタ）意味を考察しようとする姿勢は、近年に至るまでの最澄研究の蓄積によってようやく可能になったと言える。本論文の試みもまたこういった動向に連なるものである。

審査においては、次のような意見が審査委員から提示された。

- ・ 史料の評価に乱暴な点が見られる。例えば、最澄と興福寺との関係について鎌倉時代に成立した史料や法相宗側の史料のみを用いて論を進めたり、著作に三論宗に対する言及が少ないことを以て最澄が三論宗に関心を抱いていなかったと断ずる等である。
- ・ 箇条書き形式が多い。このこと自体は、膨大な資料を検討したことの表れであり、整理して提示しようとの意図に依るものであろう。しかしながら、それら相互の関係や評価が不十分なままに結論に至っている箇所が目につく。
- ・ 「後に詳述」などとしている箇所が多く、議論が錯綜している。また、全体的に、初めに結論ありきの印象を与えかねない構成になっている。  
複雑な問題を取り扱っていることは事実だが、行論・構成をもっと工夫することができたのではないか。
- ・ 多数の用例を文脈に沿って確認している点は、大いに評価できる。例えば、湛然の著作引用を検討するに際して、湛然の名ばかりか書名すら示さずに引用されている例すらもピックアップしていることは、提出者が安易にテキスト検索に頼らず、丁寧に文献を確認していることの表れである。
- ・ 「有智者」「後学」あるいは「学生」等と呼ばれる人々が、東国の道忠教団などを指すことを提示した。最澄がこれらの人々を将来的に天台法華宗を担う菩薩僧の「供給源」と捉えていたという。また、殊に、最澄と徳一との論争は、お互いを敵視したためであるよりも、天台法華宗を担う人々を誘致するためであるとする。これらの指摘は、大変興味深いものである。
- ・ “護国”、“御霊”といった、本論文の重要概念が十分に定義・説明されていない。また、“護国”のために“御霊”を鎮める「菩薩僧」を「七難を除く僧」と定義しているが、最澄、桓武天皇いずれの言葉にも明確にそのように述べている箇所は無い。多数の先行研究等に依りつつ、状況証拠を積み重ねることによってこれらの重要概念を浮かび上がらせたことは重要な成果である。その一方で、明確な定義無しに論を進めることになっているのは、残念である。  
しかしながら、“護国”等の概念が最澄の思想を明らかにするために極めて注目すべきであることを提示した点は、本論文の評価すべき点である。

以上のような幾許かの問題はあるものの、限られた紙幅の中でこのような大きなテーマに取り組んだためであるとも言える。これらについては、著者が今後取り組んでいくべき課題として捉えるべきであろう。むしろ、本論文は、今後に詳細な確認をしていくための大きな見取り図として十分な価値を持つ。膨大な著作と関係者が交わる最澄という人物を、「護国」というキーワードのもとにまとめることで新たな最澄像を描き出そうとしている点は、大いに評価できる。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2022 年 1 月 7 日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、英亮に大谷大学博士（文学）の学位を授与する事が適当と判断した。